

活動報告書

報告者氏名：坂本 恭子

所属： 山口県立山口総合支援学校

記録日：平成26年2月28日

【対象児の情報】

○学年 中学2年生男子

○障害名 肢体不自由（脳性まひ）、知的障害

○障害と困難の内容

- ・発語はないが、内言語はあるようで、こちらの問いかけに対しては、視線や口、上肢の動きで意思表示ができる。しかし、表出動作までに時間がかかることが多く、意思が曖昧な場合や不随意の動きもある。生活の中で本人からの発信ができにくい状況にも問題があると考えている。
- ・座位の保持にも困難があり、常にスイッチの設置場所を確認し修正することが必要である。
- ・可動部はスイッチによる操作が可能な状況だが、活用できる機器類やアプリが限られる。

【活動目的】

- 当初のねらい 伝わる喜びや楽しさを多く経験することで、コミュニケーションの意欲やスキルを高める。
- 実施期間 平成24年10月～
- 実施者 坂本恭子（教諭）
- 実施者と対象児の関係 学級担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

- ・学習や活動へのモチベーションは高いが、家庭以外では表情や声による感情表現が少ない。
- ・小学部6年生のときに、スライドスイッチ等で選択表現ができるようになり、言葉や文字、簡単な文章を理解できていることがわかった。

○活動の具体的内容

まず「TALKING AID テキスト版」を試したが、その時点では課題や負担が大きいと考え、文字+シンボルを選んで伝えることにしたが、可能なアプリとスイッチインターフェイスがなかったため、まずはできることからスタートした。

設定した活動の概要とアプリ選定の理由

① <昨年度からの取り組み> 「DropTalk」(1メッセージ) + iPad タッチャー



1) 挨拶や係活動等場面に合わせた言葉をスイッチで操作して、伝えることを楽しむ。

→ 自分のタイミングで発信できる。

2) 「はい」で選択肢から選ぶ、答える。

→ 選択ができる。応答のコミュニケーション

- ・シンボルに文字をつけた画像を使用。
- ・アプリはスイッチに対応していないが、小学部からこのシンボルを使用しており馴染み深く理解しやすいことや、1メッセージでの単純な使用なら、操作するための補助機器の設定が容易。



設定した活動の概要とアプリ選定の理由

② <本年度からの取り組み> 「SoundingBoard」 + でき iPad。



1) 余暇活動やその他の活動、気持ちなど、意思を選択して伝える。

→ 自己選択・自己決定ができる。

- ・1スイッチによるオートスキャンが可能で、スキャンの間隔を対象児の実態に合わせ変更することも可能。スイッチインターフェイス“でき iPad。”の発売により、当初より望んできた「自分で選んで伝える」

ことが可能になった。

③<家庭での取り組み>

「DropTalk」とiPad タッチャーの使用を始め、家族との場面に合わせたコミュニケーションに取り組んだ。

○対象児の事後の変化

①の取り組みについて

- ・朝の挨拶では、導入当初は、時間がかかり反応も鈍かったが、挨拶ができ褒められる経験の中で、微笑んだり鏡の前で挨拶してみても楽しむ姿も見られた。先生や友達からの挨拶に、頭を大きくふりかぶって勢いよくスイッチを押すことも増えた。また、自分から挨拶する場面も見られた。
- ・初めは選択肢を、頬スイッチ+「はい」で選ぶのに時間がかかり、カードの読み上げを何度も繰り返すことが多かった。しかし「選んで伝える→できる→楽しい」の経験を重ねたことで、選ぶ時間も短くなり、現在は、こちらからの質問に対して、自信を持って答えることができていると感じることが増えた。
- ・音楽を聴いている時にイヤホンが耳から落ちると、以前は困ったような顔をしてジッとしていたが、「先生、来てください」の画面を出してあることを伝えておくと、ほぼ確実に教師を呼び、援助を求めることができた。iPad がスリープ状態のときには、声を出して周囲に知らせた。
- ・朝、バスに迎えに行きあいさつすると、笑顔や声をあげて返すことが見られるようになった。



・高等部の先生と朝のあいさつ



・「はい」で選択



・困ったら「先生、来てください〜」

②の取り組みについて

- ・スイッチを押すとオートスキャンがスタートし2回目で選べることをつかむのが予想より早く、画面を示すと、自分からスタートして選んで伝えることができるようになった。現在メニュー画面の操作を試行錯誤しているような場面が見られる。
- ・学習前や途中に、教師の顔を見ながら喜ぶことが増え、伝える相手を意識しながら取り組んでいる。
- ・首をしっかり動かして力強くスイッチを押すことが増えた。
- ・スイッチが押しづらいときや、iPad がない時には、以前の方法に加え、声で応えたり呼んだりすることやスイッチを押す動きをするなど、できる方法で意思を伝えようとするが増えた。



③の取り組みについて

- ・家庭でも外出先でも、落ち着いてスイッチを押すことができた。

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的な気づき

自分の目の前にいつもあることで、生活の中で役に立つものとしての認識ができたのではない

iPad はシンボルを効果的と思える位置に提示できるので、視覚的な面からも理解を助けることができたように思う。また、いつでも発信をすれば反応が返ってくるという状況があることで、本人主体の発信の機会も増え、より実用性を実感してもらえることができたのではないかと感じている。

「伝える」→「伝わる」喜びや達成感が、安心感や意欲・自信に繋がったのではないか

大きな声で笑い転げることや、声を出すことが増えた。特に、彼は横になりリラックスしてテンションが一番上がる昼食前後が一番声が出しやすいようだが、この時に iPad の使用環境を整えるのが難しい。しかし、この場面で、口頭での問いかけに声で明確に答えることが増えた。

iPad やスイッチが使えない時にも、どうにかして伝えようとするが増えたことは、iPad という自分と相手をつなぐ物を通して、わかりやすく「伝える」→「伝わる」経験を重ねることができたことで、彼の「伝えたい」という意欲が育ったということではないかと感じる。また、あいさつや選択の場面で見られる、スイッチを意欲的に押す姿や、新しい方法を積極的に取り込んでいく姿に彼の自信や成長を感じる。こうした意欲や自信が、次へのステップを軽くし始めたと感じることができた。

○ 現在の状況と今後の見通し

以上のような実践に昨年度より継続して取り組んできた。事前状況として、スイッチや iPad を用いた応答や発信が増え、声での応答、発信も明瞭になるなどの変化があった。

しかし、本プロジェクトの参加者との意見交換や、ATAC、最終成果報告会などに参加する中で、今回の取り組みの評価が、生徒の客観的事実よりも報告者や周囲の教師の「できるようになった」という主観や解釈を元にしており、評価を裏付けるための検証が不十分であったことに気付いた。例えば、次のようなことである。

- ・スイッチを押す動きが、不随意的なのか随意的なのか
- ・スイッチを押す動きが、意図的なものなのか、偶発的なものなのか
- ・選んだ選択肢が、本人の意図を的確に表現したものなのか

また、最終報告書を作成するにあたり、東京大学 中邑賢龍教授に来校していただき、検証や検討を行い、次のような指導を受けた。

- ・基礎的なコミュニケーションの表出から丁寧に取り組むとよい
- ・OAK のモーションヒストリーを活用するのもよい 等

これらの指導を参考にして、まずは生徒の状況理解、表出などのコミュニケーションに関する実態把握を、事実の確認に基づいて再度丁寧に行いたいと考えている。そうすることで過小・過大な解釈を避け、生徒の変化を的確におさえた実践に変えていくことができると考える。今後は、実態や成長に合ったコミュニケーションについて検証を重ねていくことを第一にして取り組んでいきたい。

また、今後前向きに取り組んでいくためにも、この度の取り組みについてしっかりと振り返り、共有していきたい。今回、障害の程度が重度の肢体不自由のある生徒の実態把握の難しさを改めて実感した。しかし、取り入れるべきことや、コミュニケーションの指導・支援機器を導入する上で配慮すべき大切な点に気づけたのは大きな学びであった。これらのことを生かし、生徒たちの現在および将来の生活をより豊かにする取り組みに近づけるよう努力したいと考えている。